

れに追いうちをかけるように「病」が私に襲って来た。

・又、身体の衰えのみならず、精神もこの太宰府の謫居生活とともに衰耗し、愁いが深まるばかりである。

・そして今、私に迫っているものは「死」の賊である。この賊は先の「老」「病」とともに絶対に逃れることは出来ない。

・今は、専ら観音菩薩にすがって、浄土往来の一道に向かうことを念ずるのみである。

考察

「513 偶作」に投影の指摘できる『白氏文集』の一考察

『白氏文集』の中に「487 送春」という作品が存する。既にこの詩からの投影の指摘が金子彦二郎氏よりなされている。(注一)以下全文を挙げてみる。

487 送春

三月三十日 春歸日復暮 三月三十日 春歸り日復た暮る

惆悵問春風 明朝應不住 惆悵して春風に問ふ 明朝應に住まらざるべしと

送春曲江上 眷眷東西顧 春を送る曲江の上 眷眷として東西に顧る

但見撲水花 紛紛不知數 但だ見る水を撲つ花 紛紛として數を知らず